無条件降伏

於京都教育文化センター 1965年5月29日

# 【目次】

# ●神さまの前に無条件降伏

人生には非常に大事な瞬間がありますので、どうか今晩一晩だけでなく、できれば明日の午前も午後もまた夜もできる限りいらっしゃったらいいと思います。しかし、どの一回も一回限り、非連続の連続という心構えで私たちはこれに臨みます。

今日は「無条件降伏」という題で、明日は「中央突破」、その次は「決定的勝利」という題でお話します。今日だけお出になると、降伏でお終いになりますから、どうぞ、決定的勝利まで行っていただきたいと、こう思うわけです。

これはだいぶ、ぶっそうな題ばっかりで、なにか好戦的な、戦争でもおっ始めるような題でありますが。いや、そうではないので、実は戦争が終ったからこういうことを言うのであります。日本は20年前に、1945年に無条件降伏をアメリカおよび連合国の前にした。せっかく無条件降伏をしたのですから。そして武器も投げ捨てた。

日本刀は世界一の刀です。私もブリテッシュ・ミュージアムあたりで飾ってある日本刀を見ると、ヨーロッパのどの剣よりも日本刀は素晴らしい、神々しさを持ったところの剣である。やはり日本人の魂がそこにこもっている。日本刀は棄てたけれども、日本刀にこもっているところの魂というものはもっと素晴らしく磨きあげられなければならない。そのことを痛切に思っております。

この頃の青年がどうも根性がないとか言って、だいぶオリンピックのときに問題になったようです。「日本人は大和魂を捨てたのか」と、あるドイツ人が言ったそうです。とにかく言葉の一番深い意味において大和魂というものが大事です。吉田松陰先生も、

「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」

と言って武蔵野の露に消えましたが、しかし、吉田松陰先生の大和魂は決して滅びはしない。

日本はアメリカに無条件降伏したけれども、もうひとつその背後にいらっしゃるところの神さまの前に無条件降伏することを、この歴史的な大事件において、あのときに本当にしなかった。そして二十年後の日本はどうもあまり芳しくない状態であろうと思います。もちろん、いろんな意味において進歩発展もしているでしょうけれども。しかし、日本の一番の問題はやはり、日本人の魂の問題であるということは明らかであると思います。当時、「一億総懺悔」なんていう言葉がありましたけれども、全くこれは空言でありました。

二十年たった今日、「無条件降伏」と、こんなことを言うのはずいぶん時代錯誤みたいな、遅ればせみたいな話ですけれども。しかし、無条件降伏ということが全然新しい意味で私たち一人びとりの個人の問題として把握されなければならない。福音の世界はこの無条件降伏から始まるんです。今晩は主として福音書にあたってみたいと思う。

# ●私を見た者は父を見た

「神さま」と言いましても、これは空漠としてすべからず、いくら冥想してみても、どうにもならない。仏教的な悟りの世界といったものもひとつの行き方でありますけれども、福音の世界はもっと非常にハッキリとしている。それはキリストとお釈迦さんを多少読んでみると分かるわけです。もちろん、お釈迦さんの世界は素晴らしいものでありますけれども、イエス・キリストはもっと単純でしかも非常に内容の凄いものであります。

ヨハネ伝14章のところで、トマスがイエスに聞きましたら、イエスは、

「私はお前とこんなに長くいたのに、まだ分からないかね」

と。５節のところに、

「５トマス言う『主よ、にゆき給うかを知らず、でその道を知らんや』

もうそろそろ、キリストはどこかへ行ってしまおうと、こういうわけですが。

６イエス彼に言い給う『われは道なり、なり、なり、我に由らでは誰にても父のにいたる者なし。」（ヨハネ14・５～６）

イエスは彼に言われた、

「私は道である、である、である。私によらなければ誰でも父なる神の御許に行く者はない」

と。イエスという道、イエスという真理、イエスという生命。これは定冠詞が付いてまして、

「この真理、この生命、この道によらなければ、神のところに行けない」

という。

「７汝等もし我を知りたらば我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』８ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、然らば足れり』９イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり」（ヨハネ14・７～９）

まぁこんなことが言える人はほかにいないわけです。

「私を見た者は父を見たのである」

と。イエスというこの人は具体的にナザレのイエスです。「躓きの石」と言われるような人物であります。そのイエスが、「私を見た者は父を見たのだ」と。神の子かキチガイでなければ言えない言葉であります。

神についていくら研究しましても、冥想しましても、これはどうにもならん。それで、イエスという具体的な人において神を見る。今は春、花が咲いてるけれども、太陽の光はなかなか見えない。けれども、花というものに日光が結晶して、そして日光を受けて花は咲いている。花において日の光を見る。

「花を見し者は日の光を見しものなり」

というわけであります。イエスは、「私を見た者は父を見たもの」と、ハッキリそう言われた。

イエスという方はあまり説明なさらない。断言して簡単に言って、もうそれっぱなし。あとはそれが分かろうが、分かるまいが、躓こうが、仕方がないというようなわけです。キリストの言葉は非常に烈しくまた率直であって、福音書を読んでも、とてもかなわんです。

イエスという人はそのように神さまの現象体である。ギリシア語で「エイコーン」「似姿」という字がありますが、「神さまの似姿」という。創世記に神話がありまして、アダムとイブ、人は神の似姿に造られている。この「似姿」というのは「セレム」というヘブライ語ですが、しかし、昔の人はなにか神話的に表現したけれども、要するに本質が同質的なんです。人は神と同質的に造られている。だから、人間の中にこの神性がある。仏さんの世界でも、

「山川草木くあり」

というでしょ。我々の中に本来はこの神性があったわけなんですが、これが非常に希薄になったり、濁ったりしてしまって、どこに神性があるかというようなわけです。そういうように神性がほとんど失われてしまった。いや、あってもそれは主動的な力にはなっていないというのが正直、現実の私たちの姿であります。

ところが、イエスという人は、

「自分を見た者は神を見たのである」

と言われる。神の80何パーセントを見たとか言うのではなくて、「神を見たのだ」とハッキリ言ってますから、イエスは百パーセントに神さまを表した。けれども、彼は決してそれを自明なこととはしていない。いつも、

「どうかあなたのがなるように。汝の聖なる御意がなるように」

と、これがイエスの絶えざる自覚であります。

# ●幸いなるかな霊の貧しき者

いつも私は引き合いに出すんですが、この山上の垂訓の一番先の句です。

「幸いなるかな、心の貧しき者、天国はその人のものなり」

と。あの「心」という字は「霊」「プニューマ」という字です。

「幸いなるかな、霊の貧しい者。天国はその人のものである」

という。

「キリスト教」というのは、私が嫌いなわけは、これは教えではない。キリストは教えているのではない。キリストは、告白であります。アウグスチヌスの『告白』というのがあるが、イエスの告白というのは最大最高の告白なんです。「山上の垂訓」は「山上の大告白」であります。

「幸いなるかな、霊の貧しき」というのは、イエス・キリスト自身が――彼はどの一言も、自分ではらわたから体験しないことは一言も言わない。決して頭でものを言わない。理解してものを言うのではない。みな身に付いている。身についたものをそこに吐露しているのがイエスの言動である――イエスは貧しいんです。「貧しい」というのは乞食のように何もないということ。あのギリシア語はそういう意味です。もともと、キリストの言葉はアラミ語ですけれども。

「霊が自分を何者とも思ってないものが幸いである。天国はその人のものである」

ということ。

私がなぜこの「無条件降伏」という言葉を使うかというと、イエス自身が絶対無条件降伏者であったのです。神さまの前に無条件降伏をしていた者はイエスである。他の人は、私たち人間は、何か条件付けて、自分を「サムシング、エトバス」（何者か）だと思っている。けれども、彼は自分を何者とも思わない。「ニッヒツ」（無）である。このニッヒツは虚無の無ではないですよ。これは無私、私が無いという無私。私心が無い。自分を何者とも思ってないで、実際自分を本当に神さまの前に我が意志を否定する。

人間の中心は意志といいますね、カントの哲学でも。意志と言おうが心と言おうがいいけれども、とにかく、人間の一番中心であるところのもの――哲学的にいえば意志でしょうし、宗教的な言葉でいえば霊ということ。心理的にいえば心か何か知りませんが――そういう一番中心のものを神さまの前で自分を何者ともしない。

ある青年がイエスを「善き先生」と呼んだら、

「なぜ、私のことを善いと言うか。善きものは神さまのほかにない。私は何も言えない、何もできない」

と、イエス自身がヨハネ伝の中でそう言っている。

「われ何事も教うる能わず、われ何事をも為し得ず」

と、言っております。ああいう言葉を、皆さんはよくつかまえていただかないと困る。

# ●聖書はドラマ

聖書を何か教えだの教訓だのともったいぶるからいかん。聖書というものは一番おもしろいドラマなんですから。シェイクスピアだって何だってかないやしない。聖書という、この暗黒の混沌たる人間界に霊界から射してくるところの驚くべき白光の光。光が射してこの暗黒を光の世界に変えようとする、変質変貌させようとすることが救いなんですよ。変質変貌させようとして臨んで来ているところの、その立体構造の、多次元構造の世界であります。そのことを今度書いた『砂漠はサフランの如く』（曠愛新書第３号、一九六五年刊）という本に触れてありますから、見てください。

聖書はドラマでありますので、このドラマの劇中の人物に自分がならなくては。「ああ、あの劇はおもしろい」なんて見ていたらダメですよ。聖書という劇はおもしろいが、自分が入るとおもしろいんです。自分が入って、ひとつのその中の役割を果たすようなことになっていかなくては。サマリヤの女とキリストが会話をしているところにきたら、サマリヤの女に自分がなってキリストと今対面しているという現実をそこに展開しなくては。聖書は永遠の現在だから。単なる過去の記録ではない。それはちゃんとした歴史的な一回性の事実が我々に同質的に迫ってくる。そういったものであります。

一体、信仰の世界というのは常に現在なんですよ。現実（ヴィルクリッヒカイト）です。真に現実を現実として行く人はそこを実現することができる。ユダヤ人というのは、ヘブライ語もそうですが、完了形と未完了形だけしかなくて、それが現在完了だか未来完了だか過去完了だか分からない。ユダヤ語というのは完了と未完了だけで、しかも、単にその完了、未完了が時ばかりに関係しているのではない。信仰というのは、すべてがその現在というところにある――過去を現在に救いあげ、未来を現在に引き寄せるというような――そういった現実です。だから、信は現の世界である。「まぁ、分からないけど、信じておきましょう」なんていうのは信仰ではない。「信仰」という言葉が躓きになる。私は相当乱暴なことを言って申し訳けないですけれども。むしろ、信仰なんていって仰いでいないで、信じ受けてください。「信受」です。現在的にそれを受けとらなければしょうがない。「食らえ、飲め」ということです。

イエスという人は、神さまの前に、父なる神があまりにもの凄いものだから、自分は神の前に本当に平伏してしまった。降参して平伏しです。神の前に降参して、

「私の意志ではありません。あなたのです。あなたのです。どうか、あなたの意が成ってください」

と。「成ってください」と言ったって、傍観しているのではない。「この私を通して」と、キリストはいつも自分を提身しております。提身しているところの無条件降伏の姿なんです。この提身して無条件降伏の姿は、そうすると、この神という敵はこの提身者を通してもの凄い味方とするんです。

# ●絶対無条件の世界

マタイ伝でもマルコ伝でもルカ伝でもヨハネ伝でもいいですから――註解書なんかいらないから聖書研究会なんていうのはよして――聖書身読会という、で読むことです。「」というのは日蓮さんが教えてくれた言葉です。

「法華経を身読せよ」

と日蓮が言った。さすがに日蓮さんだ。心で読んだってだめだ、頭で読んでもだめだと。頭読、心読はだめで、こっちの身読です。日蓮という人は法華経を身読していましたから、法華経の文字が彼にしていた。と化していた。だから、「南無妙法蓮華経」と彼が言えば、そこにもの凄い仏の力が働く。

どうして、このキリスト教がなんだかボヤボヤしてしまったかというと、みんなこれをもったいぶって研究しているからです。「ギリシア語やヘブライ語が分かる人が、参考書の読める人の言うことが、大いに権威があって、そういう人の話を聞けば、もう少し深く入れる。私みたいなものはだめだ」なんて思ったら、冗談ではない。皆さん一人びとりが絶対無条件に最高最深の世界に入れるんです。そういうものでなければ福音ではない。「何か条件がなくては、これだけ学問がなければ、これだけ語学ができなければ、これだけ立派でなければ、これだけどうでなければ」というような、そういった条件が付いているならば、それは福音ではない。福音の世界は絶対無条件です。それは福音書をお読みになると分かるから。福音の世界は絶対無条件の世界です。

「研究会」というその名称を私は悪口言っているのではない。「研究会」という名称は結構ですけれども、どうか、「研究会」という名称があっても、その奥から生かさなくてはいかん。

イエスという人はどれくらい無条件な魂を愛したか。それを本当に救ったか。ところが、条件付けたり、いわんや、自分は何者かであると思った、「我こそは義人である」なんて思ったパリサイ人に対しては、マタイ伝の23章でもって、キリストは、

「偽善なる学者、パリサイ人よ」

と言って、忌憚なく七度呼びかけて、もの凄い攻撃をしている。

「お前たちは自分が道徳的チャンピオン、宗教的なチャンピオンだと思っているが、とんでもないはなしだ」

というのであります。

ザアカイなんていう、多少今まで悪いことをしていた取税人なんかは――これは『桑の木によぢのぼる』（曠愛新書第２号、1964年刊）で私は書きましたけれども――イエスがエルサレムに差しかかった時に、イエスという人の評判を聞いて、どういう男だろうかと見たくてしょうがないものだから、みんなが大勢いたので自分は小男なものだから、桑の木によじ登って、キリストを見た。当時の大預言者を上から見下ろしたら、昔の侍のお殿様だったら、「この無礼者め」なんて言われるところですが、イエスはそんな「無礼者め」なんて言いやしない。

「私は今日、お前のところに行って、今晩泊まるぞ」

と。そういった、端的に体当たりしてくるところの魂を――その人の現在が何であろうと、過去が何であろうと――自分を本当にそのままさらけ出していく人をキリストは無条件に受けとる。そして、これを本当に救う。

# ●絶信の信

一番、我というやつが、自己義認というやつがわるい。神さまの前にイエス・キリストは自分を無としました。神さまの前に本当に平伏した。この平伏しの魂のない者は、どんなにそれ自体が道徳的に善くあっても、この福音の世界に入れない。

「相対的な善なんていうものは、神の前には塵ほこりのようだ」

とかいうような言葉がイザヤ書の中にある。そういうように、私たちはどんなに力んでみたところで、この絶対者との交わりがなかったら、これは必ず蓄電池みたいに終いには――信仰だなんて言って始めは大いに意気込んでいたって――終いには放物線的に落ちるカーブのようにくたびれてしまって、「ああこの辺で信仰を、教会に行くのをやめよう」なんていうことになる。そうではなくて、自分なんてものは、そんなものは投げ出してごらんなさい。そうしたら、今度は逆に上昇するカーブでジェット機みたいに上がっていきますから。そういうものです。だから、信仰すらも、有るなんて思ってはいかん。無信の信であり、絶信の信である。信仰に絶する。己の信仰に絶する。自分の信仰とか、信念なんていうものを信じているうちはダメですよ、そんなものは。

「このイエスという人が神の現象体である。これがもの凄い」

と言って、絶対無条件にその前に降参して、これを受けとるという角度になってきたならば、これがもう行き詰まりを知らないことになる。実に簡単なんですよ。

「幸いなるかな、霊の貧しき者」

という。私たちは、この霊がなかなか貧しくなれないんです、自分というものは。本当に己にその意味において打ち勝つ人が一人でもいたか。ダンテが理想の山に向おうと思ったら、いろいろな獣が現れてきて、どうしても自分の道を塞いでいる。それで、ダンテは地獄遍歴をさせられた。これ罪の認識であります。徹底的に人間というものがどれほど失われた存在であるかを認識させられたというような書き方をダンテはしているわけです。

# ●驚嘆驚倒して読むべき書

イエス・キリストの言と動はこの福音書において表れている。マタイ伝は特にキリストの言葉が非常に整然とよく書かれております。マルコ伝はキリストの行為面が端的に劇的に展開している。ルカ伝はキリストの心の面が非常に深く描かれている。ヨハネ伝は霊の世界が描かれている。もちろん、霊は全部にありますよ、どれにも。ただ、どういう多少の赴きがあるかというと、そういった言、行、心、霊ということです。だから、ヨハネ伝がこの共観福音書を全部総くくりしているようなわけです。ヨハネ福音書というのは素晴らしい。

これらが要するに全部、この言は霊言であり、行は霊行であり、心は霊心である。ドイツ語に「タート・ヴォルト」（行為の言葉）という語があるが、キリストの言葉は「タート・ヴォルト」であった。キリストの言葉は常に行為として実現した。言行一如である。なぜ、キリストは言行一如というような素晴らしい実存になれたかというと、自分の言をも、自分の行をも問題としないで、ただ神にすっかり任せて、神の言を受け、神の力を受けたから、言行一如の世界です。それが口から発すれば言葉となり、身体において動けばそれが行動となった。だから、言も行も本来、本質的には一如なんです。それはどうしてかというと、もう信ということが受でありますから、

「の如く我を受くる者ならずば天国に入ることができない」

という。

そういうわけで、福音書を皆さんがお開きになって、キリストというものに、この具体的な神の現象体にぶつかって、

「なんとまぁ素晴らしい現実だろうか」

と驚嘆する。イエスが湖の上を渡って行けば、「一体そんなことがあるだろうか」なんて考えるからいかん。自然科学の世界の物理法則からいえば、「そんなことがあるだろうか」なんて考えるでしょう。けれども、キリストの霊的な法則、霊法の世界に行くと、そういうことがある。決して、奇蹟なんてものはない。奇蹟だなんて言うからいかん。これはみんな霊的法則が働いているだけのはなしで、それが分からないから、奇蹟だなんて言うけれども。宗教は奇蹟の世界ではない。宗教は霊法の世界です。

仏教の方でも、仏法という。お釈迦さんが、ある弟子から聞かれたときに、

「なぜ、私を見るか。私の中における法を見ろ。我は法であり、法は我である」

というようなことをお釈迦さんも言った。さすがにお釈迦さんですよ。

そういった法が働いている。しかも、この法というのはいわゆる決まった法ではない。これは神の聖なる意志が発動していく法だから自由自在で、まるで無法であるが如き法なんです。無法の法とでもいえる。自分が本当にその世界に自分の魂を打ち込んでみれば、その呼吸が分かってくる。

イエス・キリストほど自然な人はない。大自然の自然さよりも全く自然な天衣無縫的なんだ。全く天衣無縫ですよ、キリストの言動を見ていると。なぜ天衣無縫的であるかというと、本当に神の御意に従っているから、霊法が自由自在に動くわけです。

「かくせざるを得ない」

という世界になる。

この絶対無条件の世界の、無条件降伏者はそういうような動き方をしていく。降伏なんていうと、なんだかそれでお終いのようだけれども、これは本当に平伏していくと、本当の動きが今度は逆にそこに動き出す。神さまの前に降伏するんですから、人間の前ではないから。神の前に絶対無条件に降伏しているイエス・キリストという人はなんという驚くべき人でしょうか。私は、

「聖書は驚嘆驚倒して読むべき書なり」

と私の聖書の扉に書いてある。聖書は驚嘆驚倒して読むので、「これをいかにして分かろうか」ではない。

# ●無条件をたたきつける

だから、キリストは私たちに決して水を割ってものを言わん。もう私たちに不可能なことをそのままぶつけている。たとえば、

「29イエス言い給う、『まことに汝らに告ぐ、我がため福音のために、は家、或は兄弟、あるいは姉妹、或は父、或は母、或は子、或は田畑をすつる者は、30誰にても今、今の時に百倍を受けぬはなし。」（マルコ10・29～30）

なんて、乱暴なことを言う。だから、

「私のためには一切を捨てろ」

なんです。これは無条件です。「まぁ仕方がない、奥さんだけはいい」なんては言わない。日本語の聖書には「妻」という字はないけれども、ギリシア語にはあるんですよ、「妻」という字が。何でも捨てろと言う。これは危険思想ですよね。だから、キリスト教は危険だというわけで、だいぶ昔は、勅語なんかやっているときはダメだった。キリスト教は迫害された。けれども、それはキリストの本当の意味が分からなかったからです。

神と我との関係は百パーセント的である。だから、

「汝、心を尽くし精神を尽くし思いを尽くし力を尽くして、汝の主たる神を愛せよ」

という。「尽くし、尽くし」というのは、「オール」ですから、百パーセント的にやれということです。できないですよ、誰も。「誰もできないから、まぁ80パーセントでいい」なんてキリストは言わない。「百パーセントだ」と、無条件をたたきつける。どこまでも無条件のことをたたきつける。「まぁ聖書だから仕方がないや」なんて、みんなたかをくくっているからいかん。

これは現実には、我々は百パーセントに行きませんよ。行きませんけれども、その質は――量的には百パーセントにはならないけれども――質的には百パーセント的なものがあるんです。そのときはもはや左顧右眄することはない。そうしたら、上からですよ、神さまの愛と力と生命が、光が射してきまして、これがグーッと横に流れるわけです。

「そのはらわたより水、泉の如く湧き出づべし」

というのがそのことなんです。水と言おうが、火と言おうが、それは何だっていいですよ。聖霊のことは、あるときは水と言い、あるときは火と言う。

そういうような具合にして、捨てたと思ったものが、全部逆にこれに光を与える。「百倍を受けぬはなし」というのは、この捨てたと思ったものが、全部逆にこの人を通して救いあげていく。上からその人を通して貫流する。貫き流れれば、今度はとして流れる、環流する。神の前に自分を無条件に投げ出す人は――神と言ったって、キリストですよ。キリストが神の出店ですから――イエスという出店のところへ行きまして、「主さま！」と言って、これに依り頼めば、それが自分を通して流れてくる。

「汝の敵を愛せよ」

と言うけれども、我々は敵を愛するなんてことはできませんよ。どうにも癪に触ってしまってね。だけれども、その敵なんてものは、もう敵も味方もありはしない。これを受けていれば、キリストの愛が来たらば。

「敵を愛する」とはどういうことかというと、敵を逆に救い上げるということなんです。ただ人間的に愛するということではない。本当にその人のために祈り、その人の間違ったものを――自分をどう迫害しようが、どう思おうが――可哀相だと思えて、逆に私の中にあるキリストの生命的なこの生命の愛を、生命の火を何とかして灯してやろう。そうしたら彼は本当に喜ぶだろう、ということになるわけです。福音の世界は喜びのですからね。私は時々、「」なんていう。楽しいおとずれです。本当に楽しい。一人の人が本当にこの福音の世界に来て喜ぶ姿を見ることほど私は嬉しいことはない。

# ●幼児の如くならずば

パウロは、このキリストの生命が本当に自分の中に来たらば、もうたまらないんです、キリストのこの生命に溢れて。

「たとえキリストに呪われても、わが同胞のためには」

とパウロは言った。なぜ、あんなことが言えるかというと、彼の中に本当にキリストの霊が宿って、これが火を発しているからです。預言者エレミヤも、

「わがうちに神の言がわが骨を焼き尽くすようだから、そうと思っても黙すわけにいかない」

なんて言っている。それはみな、自分を本当に投げ出した無条件降伏するところに起きるところの事態なんです。

なにかこの近代人というのは意識過剰で困るよ。そして、分裂していて、なんのかんのと。もっと単純にならなくては。だから、イエスが、

「幼児の如くならずば」

と言われたのは――幼児の如くあどけなくバカになれということではない――幼児のあの単純さ、あの全一さ、全一的であれということ。単純ということは、ということはなにも、心を澄まして精神統一をしてということではない。あるがまま、頑ななやつだったら頑ななまま、分裂だったら分裂のままでいい。「私は分裂であろうか」なんて思うこともない。それが三角であろうと、四角であろうと、星であろうと、何形でもいいからそのままでいいから、そのままあるがままで、そのまま投げ出す。無条件降伏です。そのまま自分を捨てるんです。「捨てる」と言ったって、それはキリストの中に捨てるんですよ、そこらに捨てるのではない。イエス・キリストという人は、自分の中に体当たりする人は無条件に受けとってくださるんです。

# ●放蕩息子の話

これはルカ伝15章の放蕩息子の話がよく表している。キリストの譬話で一番有名です。兄と弟がいて、弟は、

「自分はもうお父さんのもとで働くのは嫌になってしまったから、遠国に行きます。少し分け前をください」

と。兄の二分の一をもらって出て行った。そしてやっているうちに、放蕩でもってすっからかんになってしまって、でもって命からがらだ。死にそうになったから、やっとわれに返って、

「ああ、これは悪かった。もう私はあなたの息子ともいえません。私をどうか雇い人の一人にしてお使いください」

と父にあやまろうと思って、戻って来た。これが砕けた魂です。この砕けた魂になって帰ってきた。そうしたら、お父さんは――いつ息子は帰って来るだろうかと思って窓から見てたと思うんですが――「野良へ走り出て、息子を抱き云々」と書いてあるでしょ。そして、指輪をはめてやったりなんかして、一番ご馳走してしまった。そうしたら、この品行方正の兄さんは、

「私は忠実にやっていたのに、まだお父さんはご馳走してくれたことがない。あんな放蕩息子が帰ってきたのにご馳走してやるなんて、お父さんは不公平だ、けしからん」

と。これは確かに、ある道徳的な角度からみたら、不公平ですよね。それで、ブーブー言って、やって来ない。ところが、お父さんはそのように絶対無条件に帰ってきた者には、「今までお前はこんな悪いことをしたではないか」なんて言ってとがめない。

「よく、お前は帰ってきた」

と言った。お兄さんがこの父の心を心として、「よくお前は帰ってきたね」と言って、その弟を同じように迎えてやったら、本当にこれはいい。ところが、「俺は」と言って、自己義認する。兄の方は父に近いけれども、本当は離れているわけだ。距離的には近くとも心は離れている。弟は、距離的には遠くなったけれども、今度は心は近くなった。自己義認の方は、キリストが大嫌いなんだ。「偽善なるかな、学者、パリサイ人」というのは。

みんな人間はどれもこれも五十歩百歩です。問題は、このように、神さまへ立ち返るかどうかということ。常に新たに死に至るまで立ち返ることが進歩なんです。我々は立ち返ることが前進なんですよ。キリストのもとに立ち返ることが前進なんです。

# ●十字架という門

「神さま」といって空漠と言っているよりも、

「我を見し者は父を見しなり。我によらずば父のもとに行けない」

と言っているんだから、キリストに行かなければしょうがない。そして、このイエスという方は、絶対無条件に降伏した者を絶対無条件に赦す。絶対無条件にキリストが赦したその赦しは十字架である。十字架が絶対無条件の赦しである。

「彼らは為すところを知らず。赦してやってください」

と。人々の罪を全部背負って――イスラエルの旧約の宗教は、小羊をほふって、大祭司が一年に一回そんなことをやる――自分が小羊となり、自分が大祭司となって、キリストがこの十字架にかかった。これはヘブル書をごらんになると、そのことがつらつら書いてあります。

この十字架の贖い、贖罪は我というものを贖いとってしまった。贖罪というけれども、我という罪びとをだ。罪とは、「わが罪」なんて言っているのではない。我というこの罪びとを贖いとってしまった。

「もう私は、過去も現在も未来も、キリストに贖いとられた者です」

と。でありますので、常にもうこの平伏しのほかに私の、皆さんの、在り方はないわけです。

にもかかわらず、人間はダメだから、躓いたり転んだり滑ったり倒れたりしますよ。けれども、本当に常にこのキリストの前に己を投げ出しては前進していくのです。決して後退しない。滑っても転んでも前進できるんです。この十字架によって既に贖いは完了しているから、これが全き姿に変わる。これはパウロが言っている、

「栄光より栄光に至りて、ついにキリストの姿に化するなり」

というように完成に向っていく。

今は三日月であるが――地上では私も三日月で終るかもしれない――けれども必ずそれは満月になることは確実である。これは私の信仰でも、私の実存でもない。キリストの恩寵がかく私を形成していく。即ち、この中に本当にイエス・キリストの御霊の霊核がある。今は核の世界だけれども、あの物理的な核ではない。この霊核がここに宿っているから、これは段々、この暗黒を征服して遂に満月になる。このいわゆる確信ならざる、与えられたる確信があるから、ありがたいんです。

「自分の信仰が立派でなければ救われない」なんて言われたら、もう私は絶望です。ですから、イエス・キリストのこの贖いの実力が、贖罪の実力が、私の罪から解放して、そこを空き巣にしておかないで、御霊を、聖霊を宿らせてくださる。

キリストの中に自分を入れることです。

「さぁ、来なさい」

という、そのキリストの中へ入るその門は一体何か。

「狭き門より入れ」

という、その「狭き門」とは何か。十字架という門が「狭き門」なんです。

「叩けよ、さらば開かれん。体当たりせよ」

と。ノックなんてではダメですよ、全存在でもってキリストにぶつからなくては。そうしたら、ぶっ倒れて、絶対無条件にぶっ倒れて――実にもう既に自分が贖われているこの十字架にぶつかりますから――そうすると、門は開かれて、あとは広々としたところの世界に入れる。そこはキリストの霊の世界です。我々は肉体でこの空気を呼吸しているけれども、魂はイエス・キリストの霊を呼吸する。

# ●内接円的関係

とにかく、そういうことは祈りの世界です。祈りとは、我をキリストの中に投ずることです。何かお願いすることではない。ご利益宗教ではない。祈りとは我をキリストの中に投じ、

「我れキリストのうちに、キリストわがうちに」

という内接円的関係に入ることが祈りの世界です。我を投ずるときに、なにもとり澄ます必要はない。あるがままを――もう惨憺たる我です――この惨憺たる我をキリストの中に投ずる。あの放蕩息子と同じですよ。

「人がどんなにお前のことを何と言おうが心配いらん」

と。そして、私たち一人びとりを変えてくださる。どんな問題や、運命環境があっても――「運命環境をもう少し整えてから、私は信仰しましょう。もう少し聖書を勉強してから、やりましょう。もう少し人に善いことをしてから、信じましょう」なんてではダメですよ――もう、あるがまま、今即刻そのまま、キリストの中に祈りの世界で飛び込んでください。ただ冥想しているのではなく、本当に飛び込んでいくんです。

今、キリスト教界で欠けているのは、そういった本当の裸の祈りがないからです。みな体裁の祈りばっかりしている。どうか、体裁の祈りはやめて、本当に全存在をもって神さまの前に、キリストの中に自分を投ずる。そうすれば、キリストは十字架の贖いをもって既に門を開いてくださっているのですから。

「恐れなくその至聖所に入れ」

とヘブル書にも書いてある。

「汝らはキリストの宮である。聖霊の宮である」

とパウロも言っているとおり、私たち自身が即ち「聖霊の宮」とされる。そして、その中にはちゃんと神殿がある。

「私は活ける神殿である」

とキリストは言われた。弟子が、ヘロデ大王が何十年もかかって建てた大きな第三神殿を見て、「ああなんと素晴らしい神殿だろうか」と言ったら、

「お前はこの神殿を見て驚くか。これは今にどの石もその石の上に残らないようにみんな崩れてしまうぞ」

と、エルサレムの滅亡を予言されたわけです。

「けれども、私は三日で建てる」

と。三日で建てると言われたのは、

「三日目に自分は復活する。復活の我は活ける神殿である。そして、今度はやがて聖霊となって、お前たちの中に入ってきて、お前たちを本当の活ける神殿にする。心配いらんぞ」

ということです。

東に行きましても西に行きましても、大きなお寺や、ドイツあたりも千人位入る教会がずいぶんありますよ。そこに行くと、「なにか宗教的な雰囲気だ」なんて。雰囲気ではないですよ。本当のキリストの世界は、神の霊がそこにおいて本当に生きているところの――それが野原であろうと、森の中であろうと、あるいは家の中であろうと、ビルディングの中であろうと、どこであろうと――そこ自身を本当の神殿とするのです。そういった意味において、絶対無条件の世界であります。

# ●絶対無条件の突入

キリストの言葉を少しあげてもいい。たとえば、あの有名なレプタの話がある。マルコ伝12章40節のところをご覧になると、貧しい寡婦がお賽銭箱の中に自分の生活の資を、たった二枚のレプタを――「レプタ」というのは昔の一銭、今の十円みたいなもので、ああいうのを二枚しか持っていない――その持っているものをみんなお賽銭にしてしまっている。イエスは、

「これはみんなのうちで一番多く献げた」

と言った。自分の生命の代を賽銭として上げた。それをイエスは横で見ておられた。

これがやはり無条件の世界なんです、キリストの喜ばれるのは。何をするにも、その瞬間において――今、皆さんは、私たちは、この瞬間において――この福音の世界に絶対無条件の突入をやっているわけです。人生はその時その時を、全生命を賭していく人が、それが本当の生き方です。

ゲーテの言葉の中にもあるでしょ。

「自分はその瞬間というものに、ちょうどうちが大きな金を賭けるように、瞬間に自分の命を賭けているような生き方をしてきた」

と。さすがにゲーテですね。とにかく、言葉の豊かな意味において、いわゆる文化的な人間としてゲーテというのは最高の人間でしょう。けれども、このゲーテが死ぬ直前に、エッカーマンとの対話の中にありますけれども、

「私は、この福音書はみんな全く真正なものだと思う。これはいと崇高な者の光がこの福音書の中に射している。それはキリストという人格から出ているところの崇高な者の光である。

イエスという方は本当に光体であると。

いまだかつてこのような神的な者は地上には現れたことがない。もしも誰かが、私の性格の中にこのキリストの前に拝跪する心があるかと問うならば、全くその通りだと答える。私はキリストの前には無条件に拝跪する」

と、彼は言ってます。それほど、人間としてみんなに「あの天才は」と言われて、鑽仰者もいるわけですが、しかし、ゲーテがどんなに凄く素晴らしくあっても、私たちはこのゲーテというものをこのキリストの光で見れば、ゲーテの姿がよく見えるようなわけです。イエス・キリストというのは本当にこれは神光、神の光でありますから。

# ●誰にでも絶対無条件に受けとれる

私たちこの暗黒のようなやつを、

「汝らは世の光なり」

と仰った。ああいうことをキリストが言われるのは何かというと、

「この私を受けてごらん。無条件にこの私を受けたら、お前たちの中に霊の光が、

これが聖霊です。

霊光が灯ったならば、これは不滅の光だよ」

と。この不滅の光を宿さなかったらつまらんよ、クリスチャンなんて言ったって。「キリストは私を贖ってくれました」なんていう命題をいくら信じたってダメです、本当に事実そうならなくては。この霊光がここで灯ったら、これは不滅の光です。どんなに嵐が来ましても、決して消えない。

もうとにかく、そういうところに来なかったらつまらんですよ、信仰の世界は。それは、「私はそんなところに行けません」なんて、誰にも言わせないんだから、キリストは。

「誰にでも絶対無条件に受けとれる」

とさっきから申し上げているでしょ。無条件に誰でもがこれを受けとれるんです。どうして今のクリスチャンは、「それだけは要らない」と言って、この一番大事なものだけは受けとろうとしないんでしょうかね。バカらしい。この空気はただで吸っているではないですか。この霊光もただでいただけるんですよ。「もう少し聖書を勉強してから」なんて、そんなことはない。どうか、今晩直ちに、あなた方はこれをしっかり受けとって帰ってください。

「ああ、そうでしたか。もう私はあるがままでよかったのですか。もう私の側の意識なんてものは問題ではなかった」

と。キリストが、

「お前は世の光だよ」

と。私たちは、

「はいっ」

と、その他に言いようがない。

「はい、光でございます。あなたが入ってくだされば、光です」

と。これだけの話です、信仰の世界は。だから、さっきから言っている、「である」ということ。信とは現である。それを無条件に受けとる。なぜ自分を、「まだです、まだそれでも」なんて言って、デモ行進ばっかりやっているか。「でも」ではないですよ。

もうそのまま、皆さん、今そのまま、この霊光が宿っている。語るも聞くも同じこと、その世界に入らなかったら、この集会はつまらんですよね。そうでしょ。今までは私というやつはしょっちゅう陰があった。けれども、この光がここに宿ったらば、この陰が自然に雲散霧消してしまう。「どうやってこの罪という陰を取ろうか」なんて、いくら百年やったってダメですよ。終いには疲れてしまう。それよりも、このガラクタな破れ衣の土の器の中に光をいただくということだけです。この十字架の突破口を通して光をいただくということだけ。この光は、絶対無条件にいただけるんだから、無条件降伏する者には。

# ●キリストの無条件降伏

ヨハネ黙示録の５章のところでヨハネが泣いてしまったですよ。

「１我またに坐し給う者の右の手に、巻物のあるを見たり。その裏表に文字あり、七つの印をもて封ぜらる。

「七つの封印」というのはここから来ている言葉です。

２また大声に『巻物を開きてその封印を解くにしき者は誰ぞ』とわる強き御使を見たり。３然るに天にも地にも、地の下にも、巻物を開きて之を見得る者なかりき。４巻物を開き、これを見るに相応しき者の見えざりしに因りて、我いたく泣きいたりしに、５長老の一人われに言う『泣くな、視よ、ユダの族の獅子・ダビデの、すでに勝を得て巻物とその七つの封印とを開き得るなり。」（黙示録５・１～５）

というのはイエス・キリストのことなんです。キリストが聖書の扉を開いてくれる。キリストという人にぶつかったら、この七つの封印が解けるんです。

このキリストを受けないで、いくら研究会を開いてギリシア語、ヘブライ語を勉強し参考書を読んで、どんなに聖書が微に入り細に入り研究し分かっても、聖書の世界には入れない。ええ、ハッキリ言っておきますよ。イエス・キリストを受けとるまでは入れない。イエス・キリストという神の現象体を本当に受けとって、無条件に「はい」と、その中に入るまでは。

キリストの言葉は、

「わが言は霊なり生命なり」

とさきほどのヨハネ伝６章に書いてある。「わが言は霊なり生命なり」ですから、言が直ちに霊であり生命である。だから、癩病人に「清まれ」と言えば、清まってしまう。死人に「起きよ」と言えば、墓から出てくるのは、キリストの言は「霊なり生命なり」だからです。空言でないから。みな、イエスという人はそのように神さまの霊的な生命を、御霊の生命を持っていらっしゃる。しかも、それをキリストは私なさらない。どこまでも神のものとして自覚しておられる。

そういうようなわけで、この霊光が来れば、陰は消える。いつかも申し上げたと思いますけれども、あの法然が、煩悩を去ろうとしてもどうしても去れない。ちょうど、陰のごときものであってどうにもならん。水に宿っている月影は菩提の姿のごときものであるが、菩提の姿になろうと思っても、どうしても水に映っている月影のような菩提の境地に自分はなれないといって苦しんだ。そして遂に至りついたところが、

「南無阿弥陀仏」

の称名になったのです、法然は。「南無阿弥陀仏」の称名でもってその救いの世界に入った。

このキリストは、キリストのこの霊光がくれば、陰は消えてしまう。即ち、菩提の姿に、キリストと同じ質の姿に、私たちはどんなに惨めであっても変わりつつある。その本質においてそうなっている。ありがたいです。そうしたらば、もはや、敵も、つまらないみもみも、くだらない争いも、どこかへすっ飛んでいくような魂になる。

とにかく、私みたいなやつがそういう気持になれるということは、それはこの絶対恩寵のほかの何ものでもない。無条件降伏をキリストの十字架がさせてくれるんだから。私は自分で無条件降伏なんかできませんよ。キリストの十字架が無条件降伏をなさったから、

「このわが無条件降伏を受けとれ」

と言うんです。それだから、

「はいっ」

と言うほかにないではないですか。

「そうしたら、私はお前の中に入って、この無条件の世界を進んで行くぞ」

というわけです。

# ●「ざるを得ない」世界

新しい方もいらっしゃるから、申しますけれども、「無」という字はこういう字なんです。

「天蓋の下のと廿の四十の林」

という。「四十の林」というのは無数の木ということで、無は即ち無数を表している。即ち、無条件の世界は、なんという豊かな無量の世界です。無量とは量が無いのではない。量り知ることができないということです。

「宗教」というのは、ラテン語で「レリギオ」「結び付き」という字です。「結合」ということなんです。絶対者と我とが結合することを「宗教」という。この結び付きがなかったら、みんな枯れてしまう、死滅してしまう。どんなに良さそうにみえても。

アベベのあのマラソンの力はなにかそんな方から来ているかもしれない。皆さんの中にマラソンの好きな人は、この祈りの世界に入ったら、アベベに負けないようなランナーになるから（笑）。本当ですよ。それは私みたいなのが、いつかからは知らないけれども、そういうことに成ってしまったから仕方がない。

仕方がないんですよ、これは。

「止むを得ざるなり」

という世界です。あの「これか、あれか」なんていう、キルケゴールの選びの世界ではない。「ざるを得ない」という世界です。何々せざるを得ない。この「ざるを得ない」という世界が一番本当なんです。

「必然＝自然」

というわけです。

「無条件降伏」なんていう言葉を聞いたら、始め皆さんは「どうも、これはあまり芳しくないな」なんて思ったとしても、もう嬉しくなったでしょ。これは嬉しくならなければうそですよ。無条件降伏してみたら、なんとしいことになったろうかと。

イエス・キリストが神の前に無条件降伏したら、あんな凄いことになって、福音書のキリストがこの通りでございますから。無条件でものを言っている。条件付けない。そうしたら、グッとキリストの言葉の奥が掴めてくる。もう聖書の奥から根源の言葉が息吹を発している。日本語なんか、どんなに誤訳してあったって大丈夫ですよ。心配いらん。その奥が読めてくるから。根源語（ウルヴォルト）が――ギリシア語でもヘブライ語でも日本語でもない――その神の根源語というのが、ちょうど音楽が世界語と同じように、そういうようなものが読めてくる。あの「」というのが仏教の方ではそれなんです。

そういうような具合で、聖書が今度は楽しくなる。聖書を教訓なんて思って読んでいたら、嫌になってしまう。聖書は楽しいなと、読んでいるうちに、なにかしらんけれども、力が出てくるようになったら、これは本ものです。さっき言ったになる。無条件に簡単に、どうか皆さん、その気合で読んでください。そうしたらば、なるほど、この世界にその魂が生きだしたら、学生は勉強がおもしろくどんどん進むし、事業している人はそこに知恵が湧いてくるし、何をやってもそこに神の栄光として現象してくる。御利益でも何でもない。どこまでも神の栄光として、キリストが神の栄光を現したように、これがキリストを表すことになるわけです。

さっきちょっと引用しようと思ったところですが、例えば、

「天国は一粒の芥子種の如し。天国は価高き真珠の如し。これを得るためには、ことごとく他の物を売って、これを得る」

という。みな、ある一つのことに対して集中しているんです。そういった福音の世界というものは全的である。全的な在り方ということ。全的ということは──間違えてはいけませんよ──その時に何か精神統一をして全的になるということではない。あるがままということなんです、この全的というのは。あるがまま、そのままキリストに投じてごらん。そうしたらば、イエスはそこにおいて本当にその人を全的に変えていく。その中心において全的な質を与えていく。そうなってきましたならば、聖書が本当に楽しく身についてきます。どうか、そういう心根でこれにぶつかっていただきたいと思います。

# ●自由な僕

マルチン・ルターが『クリスチャンの自由』の最初のところで、

「キリスト者というものは自由な主であって、一切のものに依存しない。また、キリスト者というものは一切のものの僕であって、一切のものに依存する」

という、この二つの矛盾命題を言っておりますが、これがやはり無条件の世界にくると、このことが分かるわけです。

即ち、キリストに無条件に自分を従属させていると、キリストと無条件関係になると、自主のものに――本当の自主、本当の自由ということは自分の自由に死んで、キリストの自由に生きるということです、相手は絶対者ですから。そうしたらば――これが本当の「自由」（フライハイト）になる。本当の自由というものを日本人は普通知らんですよね、「自由、自由」と言ったって。自我というものに囚われている自由はちっとも自由ではない。自我というものに我執しているから。

今度は、それが

「一切のものの僕である」

とはどういうことか。これはキリストの僕になっているんです。神・キリストの、主の僕となっている。イエス・キリストが神の僕であった。僕となっているということは、主の意志を行ずるということです。神さまの意志を行ずる、キリストの意志を行ずるということですから、この「他のものに仕える」というのはなにも屈従でも何でもない。自由にこちらから相手のひとに力を与えていく、助けていく、ということが仕えるということ、奉仕ということです。自主的に奉仕していくんですから、この「自主」とこの「僕」とは全く一つなんです。

これはやはり、無条件の降伏者は本当にそういうことになっていく。もう、明日も明後日も、今のこの話でずっと実はつながっている。なにも切れていない。絶対無条件の降伏こそ決定的勝利だということが、皆さんにもう読めてきたでしょ。どうか、そういうわけで、具体的にこの福音書にぶつかってごらんになると、なるほどイエスという方はそういうように私たちに無条件的にぶつかっているなということが分かるわけです。

# ●使徒的信仰

最後のところにきますと、ルカ伝23章に、十字架にかかっている片一方の盗賊が、

「私は生涯、悪いことをしたから、もう十字架にかけられて極刑に処せられるのも仕方がない。せめても、あなたが御国を来らせたもうときに、私を覚えてください」

と、イエスに言った。もう片一方の盗賊は、

「お前は神の子なら、俺たちをみんな救ったらよかろう」

なんて、傲慢なことを言った。ところが、最初のその心の砕けた、そのまま自分をキリストの前に投げ出した方の盗賊はイエスから、

「汝、今日、我と共にパラダイスにあるべし。

お前は、今日、私と一緒に天界に入っていくぞ」

と言われた。もうマイナス99みたいな男が真っ先にキリストと一緒に天界へ入って行った。これが絶対無条件の福音の世界です。

いつでも、遅いなんてことはひとつもないんですよ。どうか、皆さん、このキリストを受けとったら、ダイヤモンドの山よりもはるかに素晴らしいこのキリストという宝を、この生命を受けとったらば、もう人生、何がどうなってもいいということがハッキリ言えるようなことになるんです。

キリストの弟子たちもみんな始めはダメでしたよ。バラバラになってしまった。イエス一人が十字架にかかった。けれども、やがて彼らが集められたのはこの聖霊なんです。パウロ、ヨハネ、ペテロ、ヤコブというようなあの使徒たちの使徒的な信仰と同じ質に、今のキリスト教界がならなくては。カトリックだって、プロテスタントだって、何だっていいですよ、無教会だって。

私は無教会に育ったけれども、いわゆる無教会ではない。無教会出身といって、もう出てしまった。私は何にも囚われていない。だから、カトリックの人であろうと、何であろうと、胸襟を開いていけば――向うが扉を閉じれば仕方がないけれども。そんな強引に入って行きませんよ――誰であったって、私はひとつも差し支えない。何も主義も主張もない。何とか主義、無教会主義なんて、主義なんてあまり言わない方がいい。福音というものは、主義や何かで限定されるようなものではないんだから。人間の側から限定されるいかなるものでもない。もの凄いものです、福音というものは。

そういう使徒的な信仰の中に本当に入って、限りなく――これでいいなんていうところはありはしない――限りなく、満ちながら常に展開されていくような世界です。現実と理想が一つになっているような世界です。そういうような生き方で行く。もうどこの集会でも、何教会でもいい。問題は、

「そこに不滅の光が灯っているか」

だけです。そうしたらば、お互いに本当に、言わず語らずのうちに大きな和となる。さっき言ったです。本当の魂というものはこの福音を受けなければ来ないんです。大和魂を本当に完成するものは、この大和というものは、この中にキリストというものが入ってこなければ、その大和が現実とならない。ハッキリ言っておきます。

# ●百花繚乱として大調和

普通の人は、信仰というと、なにか堅っ苦しくなってね、「映画も見てはいけないだろうか。タバコも吸ってはいかんだろうか。それでは、信仰はよしておこう」なんて思う。吸いたければ吸ったっていいですよ。映画も見ていい。映画を見れば、その中から真理をつかんでしまう、逆に。みなこちらが本当にそれを支配していくことができる世界に入る。みんなこれはキリストの光で見ているのだから。キリストの光で見るから、何を読んだって、そこで皆さんは認識ができて、また創造的にそれから更に展開することができる。まぁなんと不思議な世界です。ちっともレッテルなんかない。レッテル・クリスチャンなんかダメですよ。

そういう無色透明であること。太陽の光は無色透明で七つの光を、あの虹を出すではないですか。無色の中に無限色が入っているではないですか。だから、主義も主張も立場も何もないのがもの凄いことになる。それが無条件の世界なんです。無条件です。

私はドイツへ行って、ハンブルクの教会でちょっと四、五回お話をしました。牧師さんが、「なぜそんな心境になったのか」と聞くから――キリスト教の逆輸入だよな（笑）――

「普通の水の洗礼ではなくて、聖霊のバプテスマが来なかったら、キリストから直接に霊の洗礼を受けなければダメです。洗礼のヨハネが、『私よりあとに来る者は聖霊をもって洗礼する者である』とハッキリ言っているでしょ」

と言ってやった。

皆さんは、器の大小は神さまがいろいろに造っている。花もいろいろな花があるけれども、花に変わりはない。バラの花がキキョウに、「お前はバラにならなくてはいかん」なんて言いやしない。バラもキキョウも全部、百花繚乱として大調和をなしているではないですか。そのように、いろいろな器、特色であっていい。皆さん一人びとりは、人格的個体というものは決して類型的ではない。大いに個性を発揮してください。しかしながら、個性を発揮するということは、その個性を通してキリストの無限なるものが出てくるということです。日本人は日本人らしく福音を本当につかんでいけと。ドイツ人はドイツ人らしくやったらいいでしょう。「こういうように解釈しなければいけない」なんて、そんなバカなことはない。

# ●絶対無条件降伏者キリスト

そういうわけで、問題は、みなそれぞれの在り方をもって、

「わが証人となれ」

ということです。絶対無条件にキリストの前に――神さまの前に絶対無条件降伏したキリストですよ、絶対無条件降伏者キリスト――そのようなキリストを私たちが受けとったときに、初めてなんと自由な絶対無条件者になれるかと。私たちは、現実はもちろんガタガタな問題だらけの者ですけれども、その奥に、限りなくいつも自分を突き破っては進んで行くことができるものがある。これが恩恵の世界です。

どうか、そのような生き方をしていただきたいと切にお願いいたします。そして、一人二人三人と、この世界を伝えていく。行き詰まっている人や、悲しんでいる人や、苦しんでいる人や、寂しがっている人や、病でしょげてしまっている人や、いろんなのがいますよ。けれども、これをもってぶつかっていけば、それがどういう事態であろうとも助けられていきます。皆さん一人びとりが伝道者です。なにもこんな所でしゃべるのが伝道ではない。

何とか宗教なんて、ばかにたくさん盛んにやっているけれども、なにも恐いことないよ。私は何人来たってびくともしません。私の中にキリストがいらっしゃれば、もはや問題はない。皆さん一人びとりはそういうわけです。そして逆に、みんなこれを背負いあげてしまう。もの凄いアトラスみたいなものだ。どういう事態に遇いましても、行き詰まりをしらない。それを本当に生かす人になる。もはや、どんなことがきても、不滅の一人びとりとなって、

「汝らは世の光なり」

という、灯火となって、どうか皆さんがジリジリとそのようにしてこの日本を救ってくださいよ。女の方でも決して恐いことは何もない。

もう、世界の救いはそこに残っている。この20世紀の後半はどういう危機がくるかわからない。人間というやつは、なんのかんのと言いながら、みんな武器を造って、なんとかかんとかバランスはとっているけれども、いつバランスが破れるかしらん。けれども、どういうことになりましても、その灰の中からも決して灰に化せないところの永遠の生命というものが皆さんの中に、このキリストの霊を受ければ、来ますから。ええ、もうこれは本当の大歓喜のとなる。この喜びを人に伝えないではいられない。喜びをしまっておいたら、喜びはみな窒息してしまうですよ。泉も、常に流れてやまないのが泉という。小池なんて、池ではいかん（笑）。私は小泉という名前でありたいものだな。まぁ仕方がない、変えるわけにいかんからね。池の中にも泉の湧くのがある。「池泉」という言葉が字引を引いたらあったよね、それで助かったけれども（笑）。そんなわけですから。どうかひとつ楽しくやっていただきたいと思います。おわります。

# ●祈り

お祈りいたします。

主イエス・キリストの父なるおん神さま。この集会をあなたご自身が御霊をもって親しく導いてくださいまして、感謝いたします。私たち一人びとりは、どうにもならないものです。しかし、主さま、あなたを迎え奉るときに、福音書におけるあなたに本当に親しみ、天上天下、あなたより慕わしきものなしと、本当に全存在をもってキリストにぶつかっていくときに、無条件に私たちを受けて、そして、あなたご自身が無条件に神さまの前にあり給いましたごとく、いよいよ私たちを無条件的救いの存在として、限りなく伸ばしてくださることを感謝いたします。今晩、兄弟姉妹たちがこの世界に一歩を踏みいでて、そして、喜びの魂としてくださったことを本当に感謝いたします。

どうか、明日もまた、神さま、私たちをいよいよあなたの世界に入れてくださいますように。主イエス・キリストが、

「私が日本の民に、この性質のいい民の中に、本当の喜びと力と生命を与えたい」

と仰っていらっしゃると思いますが、どうか、この目覚めた者たちが決して恐れることなく、この驚くべき福音をいよいよ大胆率直に受けとって進んで行くことができますようにおん導きくださらんことを切に願い奉ります。

兄弟姉妹たちの感謝と讃美と祈りと共に聖名により捧げ奉ります。アーメン。